



心は、一枚の紙 ドナルド・キーン

私の日常生活でも紙は多くの側面に関わっているが、紙を最も切実に考えるのは、原稿に立ち向かう苦勞に際した時である。軽い気持ちで引き受けた執筆の対象に実は何の意見も持っていなかったと悟る時、白紙の紙は私を睨み、さあ書けと迫る。

だが、紙は同じく喜びの源泉でもある。原稿を完成した時、特に長編の場合、私は連続する章を積み重ねて、自分が成し遂げた一枚一枚を見つめながら喜びに浸る。この原稿の山がやがてはどんな本へと姿を変えて行くのだろうかと思像する。私の書物はほとんど英語で執筆したもののだが、初めて日本に住むようになった昭和二十八年から日本独自の原稿用紙にも原稿を書いている。もちろん私の日本

語には間違いがあったが、それでも自分が日本に抱いた新鮮な印象がそのまま紙の上に保存されていることを嬉しく思う。

日本語で書く時、私の中にはある変化が表れる。自分は十分日本語を理解していると示したいから、無意識に頑張る傾向がある。面白い言い回しをしようと工夫したりするわけだが、「私は日本語が好きなのだ」と感じる幸福な瞬間だ。

外国人が日本の読者へ向けて、日本文学を發表することはとても勇気がいる。日本文学を自由に読めるようになるには大変な時間がかかるので、日本人以上に日本文学に対する情熱がなければならぬ。楽な勉強に切り替えない私は、日本文学が好きで堪らない人間なのである。

日本の国土も日本人も大好きな私は、七十年間愛し続けてきた日本に永住するため、今年、アメリカの住まいを引き払った。引越し準備中にも感じたことだが、屏風を眺めていると、時の経過を忘れてしまう。屏風は極めて日本的な芸術品なのに、アメリカでは結構、地方の美術館にさえ展示されている。かつて日本で暮らしていた宣教師の家族から提供された物が多いのだが、宣教師が屏風を求めたのには実用的な理由があった。当時の日本の家には隙間が多く、隙間風を遮断す



ドナルド・キーン ● 日本文学研究者、文芸評論家。文化功勞者。1922年、米国ニューヨーク生まれ。コロンビア大学、同大学院、ケンブリッジ大学を経て、53年に京都大学大学院に留学。今年、56年間にわたるコロンビア大学での教授生活にピリオドを打ち、日本永住を決断。『日本文学のなかへ』『百代の過客』（読売文学賞）『日本文学の歴史』『明治天皇』（毎日出版文化賞）『日本人の戦争』など著書多数。

るのが目的だったのだ。中国の屏風には貝殻を使って立体的な裝飾が施されている物もあるが、私はもちろん、紙にすべてを託した日本の屏風の方が好きだ。

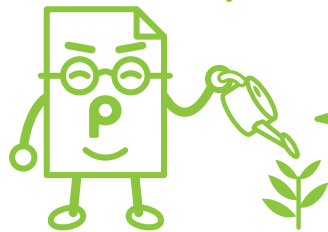
屏風と同じ、あるいはそれ以上に好きな「紙の芸術」に切り絵がある。私は切り絵の名手、宮田雅之さんと大変親しかつた。『奥の細道』や『竹取物語』などを通じて、宮田さんの切り絵に私の翻訳を添えた本を出版できたのは大きな喜びだった。切り絵を知らない人も多いかと思うが、ぜひ見ていただきたい。普通の絵とは異なる豊饒な陰影と華やきが見て取れるだろう。

私は自分の心を一枚の紙と思う時がある。新しい知識を得れば、それを心のどこかに書き留めるのだ。八十九歳になった私の心は、多くの記載で溢れている。それでもまだいろいろな事を知りたいという好奇心は尽きない。どれほど書き続けてもまだ余白がある、そんな紙のような心を持ちたいものだと思う。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりの前に、森づくり。

森林はきちんと管理すれば、ずっと利用できる資源。製紙会社は、30年以上も前から植林活動をはじめ、現在では日本を含めて世界10ヶ国、植林地の合計面積は約6,900km²にまで広がっています。なんと、これは東京ドーム約15万個分の面積。ちなみに、2012年度までに植林面積7,000km²を目指しているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

◆次回は11月3日号、杏さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake